解決の鍵は、「連続的イノベーション」

中外製薬株式会社代表取締役会長CEO 永山 治
Osamu Nagayama

世界的な人口の増加や高齢化の進展によって、製薬企業の貢献に対する期待が高まる一方で、財政問題を背景とした薬剤費抑制の動きが強まり、また企業間の競争もますます激化しています。昨年6月に閣議決定された経済財政運営と改革の基本方針(「骨太の方針」)と「ニッポン一億総活躍プラン」では「イノベーション支援の強化」が主要項目として掲げられており、政府の成長戦略においては引き続き「健康医療産業」は我が国の成長牽引産業のひとつとして位置づけられております。先端的な科学技術を駆使して治療のない疾病に対する医薬品や治療効果のより高いあるいはより安全な医薬品を開発し患者さんに届けることは、医薬品産業の重要な使命であり、イノベーション(革新的な新薬開発)が活動の中心を支え、成長のための原動力になることは間違いないと考えております。

その一方で「財政再建」の道筋をつけることが急務となる中、社会保障費、特に医療費・薬剤費の抑制が最重要テーマとして議論されており、ご承知の通り、昨年から「特例拡大再算定制度」が導入され、売上高の大きい医薬品に対して薬価の再算定が行われました。医薬品を経済成長の牽引産業として位置づけつつも、こうしたイノベーションの阻害要因となり得る政策が出されたことに対し、業界を挙げて反論・提言を重ねましたが、残念な結果となりました。

昨年はじめに米国・タフツ大学より発表された論文によりますと、新薬をグローバルで開発するには、約26億ドルのコスト(失敗プロジェクト含む)を要し、これは10年前と比べて約2.5倍と大幅に上昇している点は注目に値します。その背景には、2000年にゲノム解析に関する、いわゆる「クリントン・ブレア宣言」が出されて以降、新たなタンパク・遺伝子解析技術やIT技術の大きな進展によって創薬の手法がダイナミックに変化したこともあると思われます。このように創薬イノベーションの形が大きく変貌する中、私ども製薬企業は、今後更に高騰するコストやリスクに適切に対処しながら革新的な

医薬品を創出し続けるために、ますますイノベーションに真摯に取り組むと共に、政府に対してはイノベーションの「適正な評価」を引き続き訴え続ける必要があると思っています。

こうした厳しい環境の中、グローバルで勝ち残るためには、真に革新的な医薬品・ソリューションを生み出していくことが欠かせません。

これまで効果的な治療薬や有効な医薬品がなかった疾病領域における「アンメットメディカルニーズ」に対して、低分子医薬品やバイオ医薬品は革新的治療法を提供してきており、その医薬品創製の技術も日々進展しています。今後もこれら医薬品が成長することに加え、中分子医薬品や核酸医薬品、遺伝子／細胞治療、更には再生医療などの新しい医薬品や治療法の研究も活発化すると思われます。このようにイノベーションを実用化し社会にベネフィットを提供するために、引き続きバイオテクノロジーやケミストリーの果たす役割は非常に大きく、期待されております。環境変化の激しいこれからの道には、追いつける背中も、確かな地図もない、「海図のない航海」のようです。私たち一人ひとりが世界の状況に目を配り、患者さん・医療現場の声に耳を傾けながら、自ら率先して新しいやり方を考え、実行していくことが大切だと考えます。そして、産官学が密接に連携することで、連続的にイノベーションが生まれるものと考えております。

最後に、ロバート・フロスト作の「行かなかった道」を紹介します。

Two roads diverged in a wood, and I・・・
(森の中で道が二つ分かれていた、そしてわたしは・・・)
I took the one less traveled by,
(わたしは 人跡の少ない道を選んだ、)
And that has made all the difference.
(それが すべてを違ったものにしたのだ)

(2016年10月4日受理)